
白

瀬々良木ゆーと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白

【Nコード】

N6958S

【作者名】

瀬々良木ゆうと

【あらすじ】

中学の体育祭。パネル係に割り当てられた三井と長瀬。クラスからはぶられ気味な長瀬を見て、はたして三井は長瀬に対してどんな行動をとるのか……。

青春？ 一辺倒の掌編小説です。

「ねえ、ちょっと待って……」

足を止めて振り返ると、長瀬さんが教室のドアから体半分を覗かせていた。

「俺、今日塾だから」

さらりと嘘をつき、そのまま下駄箱へ向かう。

一週間前、体育祭に向けての係決めが行われた。何でもいいやと思い、次々に呼ばれる係の名前を傍観していたら、残り物のパネル係に割り当てられていた。各色の陣地の後ろに立てられる、絵の描かれた巨大なパネルを作る係だ。やばい、一番面倒なのに当たっちゃまった。そう思った矢先、俺はいつもの通り超脇役に徹することを即座に決めた。

先ほど声をかけてきたのは、自他共に認めるクラスの幽霊、長瀬白菜だ。席替えのくじ引きではいつも四隅を引当てる。授業中に先生に指されたところも見ることがない。存在感が薄すぎて逆に目立つ、というわけでもなく、目にかかりそうな前髪や極度に白い肌も含めて、とにかく総じて幽霊なのだ。

当然クラスの奴らは彼女をからかう。幽霊、亡霊、存在薄子さん、男子も女子も言いたい放題。だから俺は関わらない。からかうのは嫌だが、彼女を擁護して自分もその対象にされるのはもっと嫌だ

翌日、昨日長瀬さんを突き放した罪悪感を感じつつ放課後を迎える。体育祭までとにかく時間がないために、作業は放課後の時間を使って進められる。

「じゃあ長瀬さん、あと三日のうちに下絵お願いね。それが終わったらみんなで色塗りに入るから。時間ないから急いでね」

パネル係のリーダー香川さんは長瀬さんに早口で指示を与えると、

他のメンバーと共に早々に帰宅の準備を始める。では俺も……

「三井君」

う……。いや、今日も塾だから。今度は振り返らずにみんなに紛れて下駄箱へ向かう。

数分後、罪悪感に耐えることができなかった俺は視聴覚室の扉の前に立っていた。そつと中を覗いてみると、長瀬さんがちょこんと一人で座っている。裏側を木の棒で固定された大きな白い紙には、龍のような虎のような絵が奇麗に描かれていた。

「すごいな。それ龍？ それとも虎？」

長瀬さんはビクツと肩を揺らしてこっちを見る。

「うん」

うん……つてどっちだよ。

「これは白虎ごまじって言ってね、伝説上の生き物なんだけど、白組にピツタリだと思って。秋の象徴でもあるし」

初めて近くで聞いた長瀬さんの声は、少し鼻声がかかっていて驚くほど可愛い。続けて俺は気になっていたことを聞いてみる。

「昨日もだけどさ、なんで俺に声かけたの？」

「え、えつと……三井君つて、私と似てるから……」

え？

「なんか、雰囲気っていうか……私と似てる気がして」

そんな。俺も陰では幽霊と言われているのかと思うと、背筋に軽く電気が走る。

「あのさ、手伝うことないなら俺帰るから」

「……え」

絵は描けているし、これ以上一緒にいてもリスクが増すだけだと感じた俺は、さっさと視聴覚室を後にした。

「何してんだ俺」

幽霊に似てるなんて心外だ。俺は無難に過ごしてるだけだったの。

三日後。白虎という伝説上の生き物は、どでかい紙の上に威風堂々と存在していた。どっかの美術館に飾られたものを持ってきたんじゃないか？ そう疑うほどに鮮やかに表現されていた。

「すじ……」

言いかけてリーダーは首を振る。

「な、なかなかいいじゃない。けどさ、私この生き物知らないし、色塗れないや。ごめんね」

は？

「ってことで、体育祭まであと五日。色塗ってちゃんと完成させてね。自分の描いた絵なんだから、責任は持たないとね長瀬さん」

言い終わるとリーダーは他のメンバーと帰宅の準備をする。

いくらなんでも、それはないだろう。

長瀬さんは、すぎるような目で見える。俺は言っちゃった。

「さあて、今日も塾か。ダルいなあ」

なんて情けない。けど無難に中学校生活を終わりたいのが本音。グサグサと心臓に刺さるトゲに耐えつつ下駄箱へ向かう。

体育祭まであと二日となった放課後、俺は視聴覚室にいた。

「これさ、白って塗っても変わらなくなるか？」

「うっん。塗らないと立体感とか出せないから、時間かかるけどやらなきゃ」

いや、本当に時間ないんだけども。

芸術品は着実に完成に近付いていたが、当日の準備を考えると、色塗りは今日中に完成させなければならぬ。焦る俺をしり目に、長瀬さんは淡々と作業をこなす。

状況の通りなのだが、リーダーが理不尽すぎるセリフを長瀬さんに吐いたあの日から、俺は毎日残って一緒に作業をこなしていた。かわいそうだからではなく、なにもしない自分が許せなかったから。

「急いごうぜ」

「うん。ありがとう」

そう言った長瀬さんの声は、今まで聞いたことないくらいに明るかった。

体育祭当日、リーダーの香川さんが休んだ。もしパネル賞を受賞してしまった場合、誰かがリーダーの代わりに全校生徒の前で一言感想を述べねばならない。

「お、俺は嫌だぞ。やらねーよ」

「お前副リーダーだろ。じゃあどうすんだよ」

メンバーの視線は長瀬さんに向けられる。

「これ作つたの幽霊だし、お前やれよな」

長瀬さんの顔がみるみる青ざめる。

おまえら本気で言ってるのかよ！俺はメンバーに怒りをぶつけた。

あくまでも心の中で。

体育祭が始まってからも長瀬さんは俯いたままだった。

気の毒に。いや、嘘だ。自分では気づいていたが、その感情を心の奥底へと閉じ込める。

各色の陣地を眺めると、炎の上に大きく羽を広げた赤い鳥と、青い渦の上に大きく口を開けた龍が描かれたパネルが見える。

話になんねーや。二つの絵は、長瀬さんの描いた白虎と比べたら幼稚園児の描いたそれそのものに感じた。

結局白組は、赤組、青組に続き三位となった。要するに最下位ということ。

しかしそんなことはどうでもよく、俺はその後のパネル賞の発表を待っていた。

「……最後に、パネル賞の発表です」

来た。俺は長瀬さんの方に視線をやる。目を瞑って両手で胸を押さえている姿に、また心臓を絞めつけられる。

「大迫力の白虎を描いた白組です！」

やっぱり。そうに決まってる。百人いたら百人がそう言うさ。俺は喜びと不安という異なる感情を同時に抱く。

周りを見ると、立ち上がって大きく口を開けながらハイタッチをする他のパネル係メンバーが目に入った。

俺は数秒間、奴らをにらみつけていたが、すぐに気になる方向へ視線を移した。

長瀬さんは俯いたまま動かない。

発表終了後、全校生徒が集まる中で、朝礼台に一人一人上がって一言感想を述べる。まずは青組の応援団長。次に赤組の陣地係リーダー。

そして

「パネル賞受賞の白組、お願いします」

司会者がそう言うと、静まり返る中ふわつと長瀬さんが立ち上がる。ゆっくりと朝礼台へ向かうその姿は宙に浮いているようにも見えた。生徒の数人、いや、数十人がくすくすと笑い合っている。

「すごく迫力のある絵でしたね。では、賞を受賞した感想をお願いします」

司会者が長瀬さんにマイクを渡す。

「……」

嘲笑うようなひそひそとした声が出るところから漏れる。

こいつらふざげんな。俺はまた心の中で怒る。

「……あの」

ざわざわとした声は大きくなる。

「声ちっちゃ」

「マイクのスイッチ入ってないんじゃない？」

「幽霊にだけはよく聞こえてたりして」

これじゃあ罰ゲームだ。

「あの……ほ、ほんとに、嬉しくて、今、幸せです……」

「よかつたな！ これで未練なく成仏できるじゃねーか！」
誰かが言い放った信じられない一言に、全校生徒が大笑いで呼応する。

朝礼台で俯く長瀬さん。スピーカーからは嗚咽だけが響いてくる。

俺の怒りボルテージは限界を超えた。

立ち上がり早歩きで朝礼台へ上って、俯いて泣き続ける長瀬さんの左手からマイクを奪う。

そして眼を閉じて思いっきり息を吸い込む。

「ふざけんてめーら！！ 何がおかしい！？ さっきまではおとなしく聞いてたくせに……長瀬が立った途端なんだよこれ！」

目の前では全校生徒たちが、呼吸を忘れたかのように静止している。

恥ずかしい？ いや、それはない。

「特にパネル係メンバー！ このパネル、作ったのは一から十まで全部長瀬だぞ！ てめーら何もしてねえだろ！ 毎日毎日さつさと帰りやがって……てめーらにこの賞をもらう資格はねえし、喜ぶ権利すらねえ！ 全部長瀬のもんだ！ わかったら黙って話聞けよ！」

今日一番の静まりの中、俺は息を切らしながら長瀬さんにマイクを返した。

「堂々と話せよ。次あいつらが口開いたら俺がすぐに押さえてやるから」

長瀬さんは呆然としながらこくりとうなずいた。

俺は自席に戻り、勢いよく椅子に腰かけた。両手をポケットの中に入れ、長瀬さんだけを見つめる。

周りから、これでもかというほどの視線を感じたが、もうそれも関係ない。明日から誰に何を言われようと、もう関係ないのだ。無

難な中学校生活は今この瞬間に捨てたのだから。

片づけに入った夕方、俺と長瀬さんは白虎が描かれたパネルの前にいた。

「……ごめんね」

「なんで謝るんだよ」

「明日から三井君も嫌な思いするかもしれないから……」
うっ……

「そ、そんなこと関係ないって。俺が勝手にしたことだし」
冷静になったあとに事の重大さに気付いたが、もう遅い。

「でも……私本当に嬉しかった。ありがとう」

長瀬さんは充血した目で俺をまっすぐに見つめて微笑んだ。

後悔の二文字は、長瀬さんの小さな声と大きな笑顔によって頭から消えさった。

「ちょっとそこの二人！ パネルの前に並んで座って！」

気づくと俺と長瀬さんに対しカメラが向けられていた。俺たちは言われるがままにパネルの前に並んでしゃがみこむ。

「はい笑って！」

そんなすぐに笑顔なんか作れないってば。長瀬さんなんかもつと無理だろ……

そう思って隣を向くと、そこには両手でピースをしながら満面の笑みを浮かべる初恋の女の子がいた。

(後書き)

初めまして、ゆーとです。

完全な掌編ですので、読みやすさと展開の分かりやすさを重視しました。

楽しんでいただけたでしょうか。

それでは、お読みいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6958s/>

白

2011年4月24日00時11分発行